協同的な学びの「ジャンプ課題」

「アイテム」を活用

長野・木島平村立木島平小



「アイテム」を開き、少人数グループで学び合う子どもたち

NPO法人次世代教育推進機構と筑波大学附属小学校・算数研究部が協働して開発した小学校向け教材「アイテム」。「学習テーマの理解」「習得」「活用」「探究」の4ステップで段階的に力を付けられる構成が特徴で、問題の質の高さなどが学校現場からは好評だ。

「協同的な学び」に取り組む長野県木島平村立木島平小学校（山屋秀夫校長、児童235人）も、全学年で「アイテム」を活用している学校の一つ。子どもたちが自ら考え、交流しながら解決に向かう課題設定などに活用しているという。

三つの小学校が統合し、現在の木島平小学校に生まれ変わったのは平成22年度。一小一中の環境になったことをきっかけに、授業改善を軸とした小中一貫教育に取り組むようになった。小・中で共通理解を図ったのは、「学びの共同体」をベースに置く学校づくり。同校では、45分間の授業の中に二つの課題（基本的な「共有課題」、活用・応用的な「ジャンプ課題」）を設定し、少人数グループで学び合う「協同的な学び」を取り入れている。

「納得するまで徹底的に問題を追究しようとする」―。こうした子どもの姿を大切に、実践を積み重ねる同校。そのため、山屋校長は、「思考が止まらない子どもが育っている」と話す。本年度の「全国学力・学習状況調査」の算数B問題では、特に大きな成果を挙げたという。

自己有用感高まる

「ねえ、ここはどうするの？」―。基礎・基本の学習が終わり、「協同的な学び」は分からない子どもが友達に聞くところから始まる。教師が「ジャンプ課題」を提示した後、子どもたちは自分たちの力でそれを乗り越えようとする。問題解決に向けて支え合うため、野村修治教頭は「子ども一人一人の自己有用感も高まっている」と話す。

こうした学びを展開する上で、大きなポイントになるのが「ジャンプ課題」の設定。「アイテム」に収録された「活用」や「探究」の問題は、「内容的に高度で『ジャンプ課題』に合うものが多かった」と話す算数主任の今井輝彦教諭。「教科書の問題だと、全員が『分からない』というところからスタートできないこともあった」と振り返る。

全校児童が教材を購入し、活用して3年目。子どもの対話を促すような課題になっているかを確認するために、今井教諭は「教師が事前に問題を解くことが重要」と指摘する。また、教師は聞き役、子どもの考えのつなぎ役に徹する「協同的な学び」。従来の授業スタイルとは異なるため、「教員研修も欠かせない」と話している。

木島平小☎0269・82・2029

日本教育新聞掲載　2016年2月1日付